

ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2021



秋風が清々しくなり、山や公園の木々も少しずつ色づいてきました。食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、皆さんはどのような秋を過ごしていますか。ぜひ、この秋には読書に親しんでみてください。

10月かなづき しぐれづき はつしもづき(神無月、時雨月、初霜月)

※二十四節気※

かんろ寒露 8日

露が冷たく感じられる頃のことです。空気が澄み、夜空がさえずえと月が明るむ季節です。

そうこう霜降 23日

朝夕にぐっと冷え込み、霜が降りる頃です。山野の葉が鮮やかに色づきます。

図書委員からお薦めの本

『若き数学者のアメリカ』 藤原正彦 著 新潮社

青年数学者藤原正彦は、ミシガン大学に研究員として招かれる。セミナーでの発表は大成功だったが、多くの苦難に見舞われる。その苦難を乗り越え、ついにコロラド大学助教授に推薦されることとなった。コロラド大学では大らかな学生たちや天才的な教授と触れ合うこととなる。かなり昔の本だが、数学研究者の熾烈な生き残り競争や、日本とアメリカでの大学教育の違いについてなど、筆者が実際目にしてきたことをユーモアを交えて教えてくれる。

(本のあらすじを参考にした。)

(2年生男子)

読書週間が10月27日から始まります。

終戦まもない1947年(昭和22)年、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなかで「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと、出版社・取次会社・書店と公共図書館、そして新聞・放送のマスコミ機関も加わって、11月17日から、第1回『読書週間』が開催されました。そのときの反響はすばらしく、翌年の第2回からは期間も10月27日～11月9日(文化の日を中心にした2週間)と定められ、この運動は全国に広がっていきました。

そして『読書週間』は、日本の国民的行事として定着し、日本は世界有数の「本を読む国民の国」になりました。

今、電子メディアの発達によって、世界の情報伝達の流れは、大きく変容しようとしています。しかし、その使い手が人間であるかぎり、その本体の人間性を育て、かたちづくるのに、「本」が重要な役割を果たすことは変わりありません。

暮らしのスタイルに、人生設計のなかに、新しい感覚での「本とのつきあい方」をとりいれていきませんか。

『読書週間』が始まる10月27日が、「文字・活字文化の日」に制定されました。よりいっそうの盛りあがり、期待いたします。

(公益社団法人読書推進運動協議会「読書週間の歴史」より)



主催：(公社)全国学校図書館協議会／毎日新聞社／実施都道府県学校図書館協議会
後援：文部科学省／実施都道府県教育委員会／横浜市・名古屋市・大阪市各教育委員会／全国造形教育連盟
協賛：凸版印刷株式会社

【読書感想画中央コンクール】とは、「読書の感動を絵画表現することにより、生徒の読書力、表現力を養い、読書の活動を振興すること」を目的に、全国学校図書館協議会などが主催する1983年から始まったコンクールです。感想画応募資格等は、「読書感想画中央コンクール」公式HPにて掲載されています。

○ 今年の 高等学校の部 指定図書紹介

1. 『世界とキレル』 著者：佐藤まどか 出版社：あすなろ書房

中2の夏、すてきな庭があるロマンティックな洋館に7人の子どもたちが集まって楽しい3週間を過ごすはずが、大事なスマホを取り上げられて大ピンチ！「スマホがないと誰とも繋がれない。みんなから忘れられてしまう。」SNSで世界と「ツナガル」ことで生きている舞は、あなた自身の姿かもしれません。デジタルの世界を手放すことで世界と「キレル」のか、それとも本当の「ツナガリ」を見つけることができるのか。舞と一緒に本当の「ツナガリ」を見つけてみませんか。

2. 『零から0へ』 著者：まはら三桃 出版社：ポプラ社

1945年、父を戦争で亡くし、聡一は一家を支えるために大学をやめて、鉄道総局の研究所に入所する。そこには、戦争中に軍で戦闘機の設計や製作に関わり、多くの命を奪う結果を生んでしまったことを悔いる壮年の技術者たちがいた。

技術を、人を殺すために使いたくない。平和への想いを込め、不可能と言われながら、東京―大阪間を数時間で結ぶ高速鉄道の開発に取り組む彼らを手伝ううち、聡一もいつしか想いに共鳴し、没頭していく。

子どもたちを抱え未亡人となった母親、満州での辛い経験を胸に秘める同僚女性、様々な人が、過去を乗り越え、未来へ向かう様を描いた、希望の物語。

3. 『きみのいた森で』 著者：ピート・ハウトマン 出版社：評論社

祖父と母と三人で暮らしていたスチューイ。嵐の日、祖父を失い、元気をなくしていたが、引っ越してきたエリー・ローズという少女と仲良くなって、毎日のように森の秘密の場所で遊ぶようになる。ところがある日、エリー・ローズの姿がぼやけて……消えてしまったのだ。スチューイの世界ではエリーが行方不明、エリーの世界ではスチューイがいなくなっている、というパラレルワールドを描くミステリー。二人の家族の過去には、思わぬ因縁があった。謎を解く鍵は、祖父がつづっていた「秘密の書」。二人の世界はまたひとつに結ばれるだろうか？ 一気に読ませる巧みな展開で、2019年のエドガー・アラン・ポー賞を受賞した作品。

4. 『大切な人は今もそこにいる：ひびきあう賢治と東日本大震災』 著者：千葉望 出版社：理論社

大事な人を失う、それはいったいどういうことなのでしょう。たとえ一人の死であっても家族や恋人、友人などにとってはかけがえのないひとりを失うことです。陸前高田と東京、妹・トシの死にまつわる賢治の作品が、三月十一日とひびきあう。大災害時代の死について考える。

5. 『武器ではなく命の水をおくりたい 中村哲医師の生き方』 著者：宮田律 出版社：平凡社

平和な世界をつくるには何が必要か。2019年12月、アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師。35年にわたり、パキスタンとアフガニスタンで人道支援にあたった生涯をたどりながら、その生き方、考え方を伝える。

(読書感想画中央コンクール公式サイトおよび本のあらすじ、出版社のHPを参照)